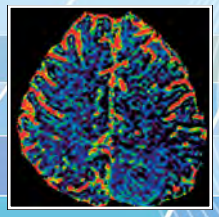
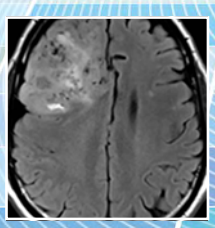
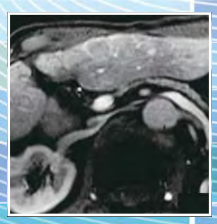
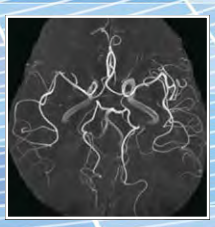
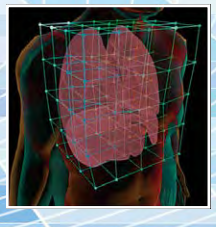
特集 Step up MRI 2016

# 明日の臨床に向けた撮像法，今日の検査に役立つ撮像テクニック

企画協力：堀　正明　順天堂大学医学部放射線診断学講座准教授

Step up MRI 2016

I 総　論

## 撮像法と撮像テクニックが与える臨床へのインパクト

堀　正明　順天堂大学医学部放射線診断学講座

例年，さまざまな撮像方法や解析手法，ハードウエアが紹介，導入され，その初期臨床応用の経験のような報告を多数目にする。その多くは，「……という方法は従来法と比較して良いものであった」というものであるが，数年経過して多くの施設で同様の撮像手法が可能となっても，案外普及していないことが多い。もちろん，従来の撮像方法による症例，疾患に対する所見の蓄積，経験というものの重要性はあると思われるが，それのみでは永久に新しい技術の導入ができないことになる。どこにその原因があるのかを考えてみた場合，一つには新技術そのものの知識の不足と，その技術の臨床での有用性，簡単に述べればどのような疾患あるいは場面において役に立つのかがよく理解できていないのでは，と考える。

また，筆者は2015年の第43回日本磁気共鳴医学会大会（東京開催）において事務局長を務め，その際すべての抄録を読んでプログラムの構成を考えた。その経験から，多数の科学的な演題や海外からの優れた研究のほかに，主に診療放射線技師の方々による撮像方法の工夫というのも大変おもしろく，かつ重要なものであることを実感した。いわゆる科学的な論文を調べても，このような工夫はなかなか目にすることはないが，実際の，主に臨床においてはMRIの画質に大きく影響するものであり，実は診断能にも影響しているのではないかと思う。

さらに，2015年の日本磁気共鳴医学会大会においても医療経済に関するシンポジウムが組まれたが，医療を取り巻く環境はまったく楽観できるものではなく，年々厳しくなっているように感じる。特に，臨床系の読者が多い本誌の読者はそのこととは無縁ではないと思っている。

今回，以上のような点に関して，筆者自身の十分な力及ばずながらも，さまざまな分野の先生方のご助力，ご協力の下，下記のような特集を組むこととなった。



〈0913-8919/16/￥300/ 論文 /JCOPY〉